



目次 1頁 三浦喜代子 2頁 奈良ノリ子 3頁 松下勝章 4頁 篠田一志 志田雅美
5頁 榎 尚子 本田真貴 6頁 土筆文香 7頁 山角正子 8頁 西山純子 安東奈穂美
9頁 長谷川和子 10頁 編集後記 JCP 紹介

有史以来の難題と課題『戦争と平和』

三浦喜代子

アダムとエバは、神様の愛の中で何不足なくエデンの園で暮らしていたのに、小さな欲心から罪を犯し荒野へ追放されてしまった。夫婦の関係にもひびが入っただろうとは想像がつく。平和は続かなかつたのだ。息子のカインは弟アベルを殺してしまう。愛し合うべき肉親なのに、愛も平和も砕け散ってしまった。神様の嘆きは想像を絶する大きなものだったろう。

悲劇惨劇は終わりを知らず、まるで病原菌のように人の心を犯し、村と村、町と町、やがて国と国が争うようになってしまった。それを戦争と呼んで久しい。近代史には第一次世界大戦、第二次世界大戦が記され、今やだれもが第三次世界大戦がいつ起こるかと恐れ慄いている。平和は遠くにかすんでしまい、戦争の顔がやたらに大きく膨らんでいる。

平和ほど慕われ求められるものはない。戦争ほど憎まれ嫌われるものはない。どうしたら、願う平和が得られないのか、どうしたら忌み嫌う戦争が避けられないのだろうか。思うに、戦争も平和も大所高所から旗を振るだけでは実現しない、机上の理論だけでは解決できない。イエス様は「あなたの隣人をあなた自身のように

に愛しなさい」と命じられた。ここに、平和を得、争いを無くす真理がある。「あなた」も「隣人」もすぐ近くにある。顔も姿も見えるリアルな存在だ。

安易な一般論だが、夫を愛せない人がいる。親を愛せない人がいる。我が子を虐待する親もいる。兄弟姉妹がけんかをしている。お隣りや近所の人を憎む人もいる。小さな家庭の中にも平和がない。小さな地域にも争いがある。これが膨らめば戦争である。平和を遠ざけ、戦争を起す源は「私」の中にあり、実に「私自身」なのだ。

私は「私自身」が原因で悲劇を起こしてしまった経験がある。イエス様の「愛」をよく知らず、隣人を愛せなかったのだ。

イエス様は「隣人とはだれか」の質問に「よきサマリヤ人」の話聞かせて真理を説かれた。そのサマリヤ人は「敵」であるひとりの人の窮状を見かねて、自分を犠牲にして労力と財力を惜しまずケアした。サマリヤ人は目の前にいたわずか一人を助けた。大勢ではない。たった一人である。しかしイエス様は彼こそが隣人を真に愛する人だと明言した。

かつて恩師がよく語ったものだ。山上の説教

にある「平和をつくる者は幸いである」についてであるが、平和とは単に頭で愛するだけのものではなく愛を實踐して「つくる」ものだ。

最近一冊の本に衝撃を受けている。『ひとり死なせはしない』。アメリカのコロナ病棟で働く日本人チャブレンの体験記である。彼は感染の恐怖に身を震わせながらも、たった一人で死んでいく幾多の感染者の手を握り、ハグしてイエス様の愛を語り、看取るのである。凄まじいばかりの現実が克明に記されている。彼こそまさに現代版「よきサマリヤ人」ではないか。

『戦争と平和』と言えど何と言っても思い出すのはトルストイの超大作小説である。全くのフィクションでなく史実がベースになっている。ナポレオンの侵略に恐れ慄くロシアが舞台である。今とは真逆である。時の將軍クトーゾフは祖国を敵に蹂躪されてなるものかと悩みを悩み苦悶する。ついに彼は住民を予め避難させ、空っぽにした都モスクワに火を放つのである。ナポレオン軍は廃墟と化した都でなす術を知らず退却するのである。トルストイは戦争と平和について重大な問題を提起している。

戦争でいちばん心痛むのは一般人の命が奪われることである。特に一人では避難さえできない弱者への暴行である。戦争は兵士を鬼畜に

してしまうのだろうか。

主イエスは「あなた自身のようになあなたの隣人を愛しなさい」と強調された。耳元に大きく響き渡ってくる。主のことばには隣人のためにご自身を十字架の上にさらした裏付けがある。

私は何をしたらいいのだろうか。今日、この日の、私の隣人はだれだろう。

『荻野吟子』を思い出す。

私の胸中には慕ってやまない敬虔なクリスチャン吟子が美しく生きている。明治政府公認の日本初の女医である。しかし吟子はその輝かしい地位も立場もかなぐり捨てて、北海道後志半島の瀬棚へ渡り、村人の病と闘った。村人は吟子の名声など知る由もなかった。先年、新幹線とバスでかの地を訪ねたが、わずか往復の途中でさえ身に応えた。ゆかりの地に立つ碑には吟子の愛唱聖句が彫られていた。『人、その友のために己の命を捨てる、これより大いなる愛はなし』。吟子の心には北国の極寒を越えるキリストの愛が熱く燃え、ほとぼしっていた。吟子は村人の真の隣人であった。

「あなた自身のようにあなたの隣人を愛する」ところに戦争はない。真の平和が温和な笑みをたたえ、平和の風が勢いよくそよいでいる。

うるたえてはならない 奈良ノリ子

私が所属している日本基督教団新津田沼教会では、聖研祈禱会で上田創牧師からヨシユア記を学んでいます。

『わたしは、強く雄々しくあれと命じたではないか。うるたえてはならない。おののいてはならない。あなたがどこに行ってもあなたの神、主は共にいる』(ヨシユア記一章九節)

聖研祈禱会は、二年の無牧期間と新型コロナウイルス禍のためしばらく休会になっていました。しかし去年五月から、感染症予防対策を講じながら再開しました。

私はこのヨシユア記を通して、どんな困難の時も主の導きがあることを学びました。

ウクライナは今、困難の中にあります。私たちはただ、主による真の平和を祈っています。どんな時も主が共にいてくださることを信じています。

ウクライナ 世界の平和 願ふ春

奈良竜胆

『死』の力の前で 松下勝章

トラウマのように、時々、思い出す説教がある。母教会の牧師のこんな説教である。当時、私は、高校卒業後間もない青年で、思うところがあつて、教会に行き始めた頃だった。

「日本では、八十、九十まで齢（よわい）を重ね、最期、眠るが如くこの世を去った、（このような死に方をした方を）大往生したと、こう申します。とんでもない、大きな大きな勘違い、気休めです。『死』は、産まれてすぐ死のうが、八十、九十まで齢を重ね、眠るが如く逝こうが、もし、その方が、ご生前中、キリスト教会で、洗礼を受けておられない場合、即ち、未受洗者である場合、滅びるのです。救われることはありません。『死』は、滅び。地獄への門、門口なのです」

父が急死した後だったことと、当時、叔父に勧められるままに「法学部」を志望していたものの、「正義」が何なのか全くわかっておらず（こんな自分が「法」など語れるものか）と悶々としていたので、この「答え」を叫ぶ牧師なる奇妙な職業人の声に妙に納得を感じたのだった。

直観で、（ああ、この人は、真実を語ってい

る）そう思った。 だけど、・・・である。

教会を出れば、人が歩いているのだ。人が笑い、妊婦もいて、小学生がランドセルを担いで学校に向かっているのだ。勤労者が、満員電車に揺られているのだ。

『死』は滅び、それが答えだ、そういわれても、そんなこと納得できるか！という思いが消せないまま、ずるずると年を重ねてきた。未だに消えたり点いたりする蛍光灯のように、チカチカしている。

真つ暗ではないのは、やはり、イエスの復活が、心に刻まれているからだろう。確かに『死』は滅び、地獄への門のような気がする。我々は、一人残らず、老醜に向い、そして死ぬ。それは、事実だ。けれど、一人だけ、その『死』の力に打ち勝った方がおられた。それも、どうやら、事実だ。だから、真つ暗ではない。二つの事実が自分の中に、なんとなくある。

重い鉄を屋根から落とすと、ドスンと地面に落ちることが事実で、鉄の塊であるヒコキが屋根の上を飛んでいることも事実なのと似ている。

そんな想いを抱える小生の目に、最近、ウクライナという遠い国のただならぬ情景が飛び込んでくるようになった。そこにある路上に転

がる屍は、かの為政者（プーチン）の命令の故にこの世に存在してしまつたものだ。ちょうど、かのローマの裁判官（ピラト）が、主イエスを十字架に追いやったように『死』の力は、人を介して、やってくる。やってくるどころか、人にへばりついている。『死』は、歩いている人にへばりついている。『死』は、笑う人に、妊婦にへばりついている。『死』は、ランドセルを担ぐ小学生に、満員電車に揺られる勤労者にへばりついている。

ただ、彼（主イエス）には、『死』は近づけなかつた。否、近づいたが、彼の前に無力だった。イースターの説教を通し、聖書の言葉を通して、異教社会の中で、はつきりと天からの声を聴く。

「なぜ、生きておられる方を死者の中に探すのか。あの方は、ここにはおられない。復活なさつたのだ」（ルカ・二四・五・六）。その復活の主の遺された声に聴き従い、今も人々が、洗礼を受け続けている。人にへばりつく『死』の力は、その救いの約束の力の前に、無力である。そうであるはずだ。だから、かの為政者の命令の声も、やがて、過ぎ去っていくであろう。孫の暖愛（のあ）の幼児洗礼に立ち合いながら、この異教社会の中で、そんなことを思う。

とりなしの祈り

篠田一志

信仰が与えられて二五年経ちました。

思い出すのは、洗礼を受けたばかりの、わたしの信仰です。

イエス様を救い主と信じ、新しく生まれ変わる喜びに満ちあふれていましたが、処女降誕や死者からの復活など、奇跡の事実に対して、確かな信仰を持って受け入れていたかと問われますと、正直自信がありませんでした。

でも、ひとつ確信を持って「アーメン」と告白できるものがあります。

それは、妻をはじめ多くの方々の祈りに支えられて洗礼の時を迎えられたことです。

つまり、わたしが信仰に導かれた力の源は、周りの方々の祈り、すなわち他の人のために祈る「とりなしの祈り」によるものだといまも感謝しております。

聖書には、この「とりなしの祈り」の働きが多く示されています。とりわけ、わたしのなかで印象深いのは、ペテロが3回イエス様を知らないと言う箇所です。

イエス様は前もってペテロが三回裏切ることを知っていました。そんなペテロに対して『・・・わたしはあなたのために、あなた

の祈りがなくならないように祈りました。ですから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい』(ルカ二二章三二節)と言われました。まさに、ペテロに対するイエス様の「とりなしの祈り」です。

その後、ペテロはイエス様のお言葉どおりイエス様を三回否むも、イエス様の愛によって立ち直り、初代教会のリーダーとして用いられたのです。

イエス様の祈りは、ペテロの信仰を守りました、同じくこの祈りは私にも向けられ、今も、わたしが信仰に繋がっている力の源であると信じています。

今、世界はこの「とりなしの祈り」が必要とされているのではないのでしょうか。

日本のメディアはロシアとウクライナの戦争を毎日取り上げ、多くの人の戦死と悲惨な戦況を報じています。また、日本を含む欧米諸国とロシアの経済戦争が解決の道だとも言及していますが、わたしには、何が真実で、何が正解なのか解りません。

しかし、一つだけ確かなことがあります。まことの解決、和解のできるお方は神さまだけです。ですから、ロシアとウクライナの和解を求めて神さまに願ひ、祈ろうと思います。

しあわせ

志田雅美

わたしは今、出て行くはずだった実家で息子と二人穏やかに暮らしている。声に出して祈り、大きな声で讃美歌を歌っても咎める者は誰もいない。コロナ禍はおさまらず、依然として脅威にさらされているが、雨風しのげる家があり、愛する家族と食事を共にし、温かい布団で眠れる。そのうえ、働く場所があり、役割を与えられ、主を信じる信仰と神の家族との交わりがある。これ以上のしあわせがあるだろうかとしみじみ思う。

それもこれもすべて神さまから与えられたもの。感謝すべきこと。あたりまえのことなどなにひとつない。時にはつらいこともあるけれど、それも十分に味わって歩みたい。

わたしのしあわせは心の平和と直結している。そして、それは神さまなしではありえない。祈りと努力も必要だ。だから、これからも祈り続けようと思う。



み言葉を信じて 榎 尚子

あるところに王様がいました。

王様はその国で一番上の人ですから何でも持っていました。しかし王様はもつと多くのものを欲しいと思いました。

そこで周りの国から初めて戦争を仕掛け、自分のものにしていきました。王様は満足したでしょうか。いえ、あの小さな国がまだ自分のものになっていないことが気になって仕方ありませんでした。思い立ったら実行しないわけにはいきません。王様は兵隊を率いてその国に攻め込んだのです。うまくいったでしょうか。兵隊たちはその国の穏やかな文化にすっかりなじみ、戦う気にはなれませんでした。

王様は戦意を失った兵士と共に自国に帰り、別の兵隊を送り込みましたが同じことでした。やがて国中があつた小さな国のような文化を取り入れるようになっていきました。苦々しく思いましたが、どうすることもできません。

これは絵本の世界です。

戦争という言葉は抽象的な概念と知っている人もいたでしょう。しかし連日の報道で今世

界中がづらい気持ちになっています。評論してさえいけばよいのではないのです。

受難週の祈禱会でサムエル記上十一章を学んでいました。敵に追い詰められにつちもさつちもいかない民の様子はまさに今のかの地と同じでした。絶望的なヤベシユの人々に、「明日、日盛りのころ、あなたがたに救いが来る」との知らせが来るのです。

ヤベシユの人々は喜び祝つたとあります。その言葉はどんなに力になったでしょう。そしてこの言葉を信じたのです。

神様が天地をおつくりになり、最後に人間を作られました。人間に地をおさめよと命じられました。良いものとして作られた地がこのように争うさまを、神様はどうご覧になっておられるでしょう。

数年前、友達から手作りのひまわりのブローチをプレゼントしてもらいました。ありがどうとは口先でお礼を言ったのですが、どこにでもある花だと思つてアクセサリーの箱の中で眠っていました。先日、箱を開いたときにそのひまわりが目飛び込んできました。手に取ると細かい花びらや芯の種が丁寧仕上げられていました。

そうだ、この花を身に着けていこうと思ひ立ち、そのブローチに合わせて着るものを選びました。ひまわりを国花とするあの国では多くの子どもや女性や高齢者が苦しんでいます。男性は最前線で戦っています。

絵本の中の王様には一人息子がいて、父親に眠る前の子守唄をせがみました。王様が口ずさんだ子守唄はみな、あの小さな国で歌われていたものでした。



エレミヤの哀歌 本田真貴

二月二十四日にロシア軍がウクライナに軍事侵攻して以来、連日武力衝突の被害が報じられ、心が疲弊してつらい。美しい街は焼け落ちて瓦礫の山になり、無辜のウクライナの人々がむごたらしく死傷し逃げ惑っている。

この惨状は、十一年前の東日本大震災の津波で瓦礫の山となった、東北の沿岸の光景と重なる。さらに福島県では、原発事故のため、十六

万人が故郷から県内外へ避難した。私は原発から六十キロの内陸部に住んでいて、避難はしなかったが、いつでも避難できるよう外出着を着て、枕元に靴をおいて寝ていたことを思い出す。

この震災の中から生まれた合唱曲「群青」を私は毎日口ずさんでいる。作詞は福島県南相馬市立小高中学校平成二十四年度卒業生、作詞は同校教諭小田美樹先生である。小高中学校は、原発から二十キロ圏内で、全域が避難区域となり、百六名いた一年生は津波で二名亡くなり、九十七名は全国へ散らされ、残されたのは七名であった。小田先生は故郷と友を失った生徒らに、「エレミヤの哀歌」という合唱曲を教え、福島県合唱コンクールに出場した。生徒らは故郷を破壊された哀しみ、怒りを激しく歌い上げ、銅賞に輝く。その歌が、コンクール審査員の本山秀毅氏の心を動かし、多くの人々の出会いにより、京都で行われる震災復興を願う合唱コンサートに小高中が参加することに決まる。小田先生は、「エレミヤの哀歌」と共に、オリジナル曲「群青」を作曲する。生徒らのつぶやき、思い、日々の言葉を拾い集め構成してそれに曲をつけた作品である。同コンサートで「群青」が発表されるや、大きな反響があり、国内外で広く卒業ソングとして歌われるようになる。

しかし、「群青」誕生のきっかけが「エレミヤの哀歌」であったことに、私は神様の天の配剤があつたのではと思う。

哀歌は、バビロニアによるエルサレム炎上と続くイスラエル人のバビロン捕囚を悲しんで書かれた旧約聖書の歌である。苦難の中荒れる小高の子ども達に、自分たちの姿と哀歌の背景を重ねて想いをつなげてほしいと、小田先生は哀歌を歌わせた。故郷を失ったディアスポラの風景は、現在のウクライナの人々の故郷を失って避難せねばならない哀しみに重なる。震災で被災した東北に多くの支援が寄せられたように、ウクライナの人々にも今世界中から多くの支援が寄せられている。小高中学校の生徒に「エレミヤの哀歌」と「群青」を歌わせた恵みの神様は、ウクライナの人々にも、きつと希望の歌を歌わせて下さると信じる。

主の慈しみは決して絶えない。
 主の憐れみは決して尽きない。
 それは朝ごとに新たに。
 あなたの真実はそれほど深い。
 私は主を待ち望む。

哀歌三章二二〜二四節

平和が生まれるとき 土筆文香

ぼくが泣けば きみも泣くよ
 ぼくよりいっぱい 涙流して
 ぼくが笑えば きみも笑つよ
 とても嬉しそうにね
 ぼくが重い病気になる、きみに会いたいと思つたとき、きみはいなかった
 大声で呼んだけど、
 きみはもどつてこなかった
 たくさんの年月が過ぎて、ぼくの病気が治つたとき、きみはもどつてきた
 どうして一緒に苦しんでくれなかったの？
 ぼくは怒りに満ちてきみをにらんだ
 きみはぼくの頭をなでてから、両手をぼくの前に開いた、その手には穴があいていた
 きみはぼくの代わりに
 苦しんでくれたんだね
 ぼくの心に平和が生まれた
 きみの持つてきた平和

祖母の祈り

西山純子

西暦二〇七二年。五月も半ばになった。庭は緑で輝いている。

響貴は七十歳、実析は六十八歳、二人共に働き盛りになっていた。二人は仲の良い兄妹、それぞれに家族もあり充実した日々を過ごしていたが、折に触れて二人で会い近況を報告し、話し合うのが楽しみであった。

五十年前の四月十日、その日は二人の父方祖父の召天記念日だった。

当時は悪夢のようなコロナという恐ろしい感染症が全世界に蔓延り、祖父が亡くなったのはその渦中であつた。祖母の願いで、祖父が喜んでくれるであろう家族葬が為された。

響貴の伴奏、実析の奉唱「ピエ・イエスがあら、礼拝の奏楽は二人の父徹志が捧げた。祖母は一年後の記念日には是非、教会で記念礼拝を捧げ、その後親戚や友人と共に愛餐の時を願い続けていたようだ。然し、コロナは去ることなく、その願いは碎かれた。自宅で式次第を組み、親族六人でその日を守った。

祖父召天二回目の記念日も、前年の暮れからの祈りにも拘わらず、やはりコロナが阻んだ。親戚を招くには未だに不穏な時代だったのだ。

祖母から響貴と実析に「ご案内」として一通のハガキが届いた。

「ご案内 四月十日(日)は信男の記念日です。午前十時半より開会される新津田教会礼拝をご一緒に捧げられたらと願っています。特に仰々しいことはしません。家族が教会で共に礼拝を捧げることで、心を一つにしたいと願います。礼拝後は藤崎の家に行き、愛餐談し信男の記念日を覚えてください。後年にこの時のごとが温かな快い大切な思い出になりますように。」

二人はその時、祖母の案内状最後の一行特に小さな文字で書かれた「後年に」以下の言葉を、さり気なく読んだが、何か心に残った。

食事前の祖母の祈りにも、「どうか、今日の一つ一つが皆に、記念として心に刻まれるものとなりませう」とあつた。

あれから、五十年の歳月が流れた。今は高齢者という言葉は殆ど死語になりつつある。特にそう呼ぶ年代が特出する訳ではない。百歳以上の人々が、ごく普通に自立して仕事しているのが珍しくないからだ。

響貴と実析は、微笑みながら話す。「純子おばあちゃんはいエス様に守られて、今も祈ってくれているんだね」。

平和への願い

安東奈穂美

私は祖父母に会ったことがない。物心つく頃には、皆すでに他界していたからだ。母方の祖父は母が幼い頃に戦死している。その祖父の写真を一枚だけ持っている。軍服姿で赤ん坊の母を抱くその顔は、若々しく爽やかな表情をしている。

母は多くを語らなかつたが、中学にもあまり通えず苦労したようだ。戦争は、その時代に生きた人だけでなく、後に生きる私達にも影響を及ぼしている。

ロシアによるウクライナ侵攻が続く四月の初め、土浦ユネスコ協会主催の「平和の鐘を鳴らそう」という集まりに参加した。ハンドベルの演奏があり、ベルの音色が平和への祈りとなって会場に広がった。

子ども達の合唱もあつた。透明感のある歌声があらゆるものを超えて私の魂に響き、自然と目に涙が浮かぶ。歌詞の中に「平和をつくる者は幸いです」とある。イエス・キリストの言葉である。心静かに神に祈りを捧げた。

私たち、一人ひとりが平和をつくる者とされますように。何よりも、今、戦禍の中にいる人々に一日も早く平和が訪れますように。

災害は突然に 長谷川和子

「平和」とはどのようなことか、改めて考えてみた。それは平安であり穏やかに過ごせることではないだろうか。

では我人生はどうであったらうか、親の愛は感じていたが不安の連続であり、家庭は恐怖の場であった。一九歳で受洗した。家庭は変化なかったが『苦しみにあつたことはわたしには良い事です。これによって、私はあなたのおきてを学ぶことができました』の聖書の言葉に納得できた。

結婚後も様々な出来事の中で、神への賛美、祈り感謝する中で、どうしても納得いかなかったのは夫が会社の保証人になったことである。

社長の一声で 押印、既にこの世にない会社のため銀行への返済を全て夫が背負うことになったのだ。私が五〇歳の時であった。子供の協力と私の薄給で、苦渋の日々であったが何とか乗り越えることができた。

しかし、どうしても逃げられない困難は突然襲ってくる災害である。

実際に体感を経験した地震は一九歳の時、体調を崩して臥せていた時、突然地震が起きたのだ。新潟沖地震であった。新潟から遠く離

れた十日町市の社宅は壁に亀裂が入り水槽から金魚が飛び出た。初めての経験に地震は怖いものだと身に沁みたのである。

それから一五年後位の時（仙台から大宮に越して一年後）ゴーツ、ゴーという、鈍い音が地面から聞こえ、生暖かい強風が窓から入ってきた。宮城沖地震であった。ブロック塀が倒れ死者がでた。仙台の我家は居間の大きなガラス窓が壊れ、風呂場の床が盛り上がった。修理に百万円以上かかったと記憶している。

次に中越地震。十代後半あの地付近に住んでいたので同級生全員に安否のはがきを出した。全員無事であったが車ごと崖に転落した者や大変な被害をこうむったと嘆く者がほとんどであった。

そして、あの東日本大震災の出来事である。多くの方が津波に吞まれ、命や家を失った。この世のものか、と目を見張る惨劇であった。十年経った今でも鮮明に覚えている。関東でも帰宅者の困難、停電等々影響を受けた。

我家でもタンスの上から大きめの人形ケースが落下、ガラスが粉々になってしまった。

半年後、友人三人と東松島に向かった。津波で流された海岸近くの広い住宅地は一戸の家もなく土台だけが残されていた。タクシー運転

手の説明に胸がえぐられる思いであった。

この状態が岩手から福島まで続いているかと思うと驚愕とし、災害の恐ろしさに（神さまの意思はどこにあるのですか）と問うていた。

暮にクリスマスプレゼントとして仙台の仮設住宅の子供達に 童話の本百冊と マスコット人形を贈った。この童話の本は三県の図書館にも送った。

最近各地で地震が起きている。直接の被害はないが揺れには気付く、そのたびに大きな被害にならないように祈る。豪雨の時は地滑りの被害が起きなければと不安になる。自然現象なので人間の力ではどうすることもできない。地震の観測はできても予測を的中することは困難とのこと。

ロシアがウクライナに侵攻して二ヶ月になる。話し合いで何とか終戦できないものか。

コロナウイルスのために世界中が右往左往して二年余り、多くの方が命を落とす状況を一日も早く収束してほしいと祈らずにはいられない。

ウィルスよ 静かに消えて お願いよ

ウクライナの 空に届けこの祈り

川柳

編集後記

篠田一志

「ロシアとウクライナの戦いが終わらぬうちに、新たな戦いが始まりました。」

ロシアとウクライナの武力戦争、それに伴う日本を含む欧米諸国からロシアへの経済制裁です。その戦争の惨状をメディアが報じています。映し出す砲弾で瓦礫と化した街々を見るたびに、老若男女を問わずに、膨れ上がる戦死の数を知らるたびに、驚愕、悲しみ、そして空しい思いでいっぱいになります。

たしかに、ロシアにもウクライナにも、そして日本を含む欧米諸国にも言い分や建前はあると思いますが、多くの人たちが願うのは即時終戦であり、平和の回復だと思えます。

『文は信なり44号』はその願いや思いに押し出されて発行しました。

ある者は日常生活や自らの人生経験を通して知った平和の尊さを証しています。またある者は詩や物語を通して戦争の愚かさを訴えています。

どうか、44号の願いを知ってください。

そして、ロシアとウクライナの和解のために、平和の回復のために、ともに祈るうちはありませんか。

後記にかえて・英雄考 三浦喜代子

「ロシアの最中にウクライナの戦禍が飛び込んできて、今や世界中が固唾をのんで成り行きを見守っています。いつたいこの暴力はだれにも止められないのでしょうか。」

世界史日本史に名だたる「英雄」と呼ばれる人々を思い起こしています。クリウス・カエサル、ナポレオン、織田信長、西郷隆盛等々。

考えてみますに、彼らは「戦争の達人」であり、残虐行為の限りを尽くしたのです。なにが「英雄」でしょうか。

人間には強者や勝者にあこがれる心理があるのでしょうか、やすやすと「英雄」を生み出します。人生という苛烈な戦場を時につまづき倒れながらさまよつた私たちの、勝利への切ない願望が生む幻影ではないでしょうか。

「勝利」の価値観がその人にとっての「英雄」を作り出すと考えます。マザー・テレサやキング牧師を我が英雄とする人もいますでしょうか。

私にとって真の英雄とはだれか。

生き方、死に方を模範にできる人こそが私にとっての英雄です。

「自分の命まで捨てて愛に生き、愛に死んだイエスさまこそ、私の誇る私の英雄です。」

ウクライナに真の平和を！

日本クリスチャン・ペンクラブ（JCP）の自己紹介

★起源は、1952年に発足した基督教文筆家協会にあり、村岡花子らプロの作家たちが立ち上げました。その後1963年に満江巖氏を中心に現在の名前に改名し、広く門を開いて、一般信徒が「あかし文章」を学び、書き、広める働きを進めて、現在に至っています。

★現在は2つのブロックで活動しています。★関東ブロック（関東以北の地域）★関西ブロック（大阪周辺と西の地域）です。活動内容は各ブロックが自主的に進めています。それぞれに作品集を出版しています。最新作は関東が『**百花繚乱 21人の自分史**』（1800円＋税）を、関西が『**種を蒔く5号**』（1300円＋税）を発行しました。ご希望の方は事務局までご連絡ください。★Web上にホームページを開いています。[\(http://jcp.daa.jp/\)](http://jcp.daa.jp/) ぜひご覧ください。

◎「あかし文章」に関心のある方は上記URLにご連絡ください。 本誌代一部 100円